

# チベット語文献『バシエ』研究の最前線

岩 尾 一 史

誤解を恐れずに言えば、チベットの歴史文献は次の二種類に分けることができる。

まず一つ目は敦煌や中央アジアから発見された古チベット語出土史料である。これらは古代チベット帝国統治下、あるいは帝国崩壊後に記された。出土史料の大半はまず仏典であるが、中には『編年記』(*Royal Tibetan Annals*)や『年代記』(*Royal Tibetan Chronicle*)など第一級の同時代歴史史料をも含む<sup>①</sup>。それらの紀年は、チベットが敦煌やタリム盆地南辺諸地域を支配する八世紀後半から、敦煌藏経洞が閉められる十一世紀初頭までである。この時期の文献の最大の特徴は、後代のような仏教史観がいまだ浸透していないところにあり、従つて仏教が浸透する以前のチベット文化を知る上で重要な史料である。

二つ目は、チベット本土にて古典チベット語で記された文献史料である。古典チベット語によるチベット史学の伝統は、十一世

紀初め頃からはじまり、チベットにおける戒律復興の動きとはほぼ軌を一にしている。このチベット史学の伝統は、現在にいたるまで存続している。この時期の文献の特徴は、仏教史観に強固に裏打ちされているところである。

両者の連絡関係は基本的に断絶している。その理由として挙げられるのが、九世紀半ばにおこつた古代チベット帝国の崩壊とそれに続く分裂の時期で、この時期に帝国期の多くの記録が失われってしまったと伝えられる。

しかしながら、幾つかの記録は散逸を免れて後の時代にまで生き延びることができた。そこで時折、二つ目のグループに属する歴史文献においても、帝国期に遡り得るような情報を見つけることができるのである。ただし多くの場合、これら古い情報は仏教というフィルターを通して再解釈・改変されているので、取り扱いには注意を要する。

本稿で紹介する『バシエ』、または『バ「氏」の「遺教」とは、二つ目のグループに属するチベット歴史文献である。古典チベット語で書かれた歴史文献のうち最も古く、その中核部分は帝國期に遡ることができると考えられている。著者は、ツェンポ・チンデンツェン治下の大臣バ・セルナン（Dba/Sba gsal sman）に帰せられる。内容は、ツェンポ（チベット皇帝）であったチンメンツェン（Khri strong lde brtsan、在位 七五五—七九七）治下において仏教が如何にチベットに根付いたか、また勸建寺院であるサムイエ建立の縁起、そしてチベットの宗論（インド仏教と中国仏教との討論）の始終が詳細に記される。特にこの宗論の結果、チベットはインド仏教を取り入れることになり、後世のチベット仏教のあり方を決定づけたのであるから、必然的に、『バシエ』はチベット仏教史にとって不可欠の書となり、プトン・リンチェンドゥップ（Bu ston rin chen grub、一二九〇—一三六四）をはじめとする学者たちが古代史を記す際、本書に依拠したのであった。研究者の間においても『バシエ』への注目度は高く、幾多の優れた研究が発表されてきた。特に次の四点は、本書の特徴や問題点を簡潔に記しており、手っ取り早く問題の所在を知るのに便利である。

- A. I. Vostrikov (au), H. Ch. Gupta (tr.) (1970), *Tibetan Historical Literature*, Calcutta: R. D. Press (Soviet Indology Series, No. 4) ㊦㊧㊨, pp. 23-26.
- Van der Kuip (1984), "Miscellanea to a Recent Contribution to / on the Bsam yas Debate," *Kailash* IX, pp. 149-184 ㊦ / on the Bsam yas Debate, Appendix (pp. 176-180).
- Philip Denwood (1990), "Some remarks on the status and the dating of the Sba bzned," *The Tibet Journal*, vol. 15, no. 4, pp. 135-148.
- Per Sørensen (1994), *Tibetan Buddhist Historiography: The Mirror Illuminating the Royal Genealogies*, Wiesbaden: Harrassowitz ㊦, pp. 633-635.
- 本稿の記述も上記の四研究に大きく依拠するところである。『バシエ』に関する研究は、次に紹介する二種類の『バシエ』写本が出版されたことよって大きく進展した。ただし、二世紀に入るや『バシエ』をめぐる史料状況は一変し、現在新たな局面を迎えつつある。そこで本稿ではまず、現在手に入る『バシエ』写本の書誌情報を述べ、次に現在の『バシエ』研究の課題を述べたい。

\* \* \*

この書のチベット史学における重要性とその来歴の複雑さを、欧米の学界に初めて紹介したのは、おそらくロシアのチベット学者 Vostokov (一九〇四—一九三七) である。夭折の天才学者の遺作として出版された『チベットの歴史文学』(*Tibetan Historical Literature*) において、『バシエ』が最古の歴史文学として紹介されており(同書二四—二六頁)、簡潔かつ要を得た説明は、今でも一読の価値がある。しかしながら、『バシエ』はそもそも稀覯本に属するものであって、彼自身が本書自体を突見することはできなかったのである。

『バシエ』写本が初めて出版されたのは、二十世紀も半ばを過ぎた一九六一年のことであった。

R. A. Stein, *Une chronique ancienne de Sam-yas : sBa-bzed*, Paris: Adrien-Maisonneuve, 1961 [以下、『バシエA』]

一九三六年から一九四〇年、また一九四六年から一九五〇年までイギリス代表(一九四七年以降はインド代表)としてラサに駐在した Hugh E. Richardson が、ラサから将来した写本のファクシ

ミリ版である。几帳面な有頭体 (dbu can) で記されたこの写本は、Richardson からフランスの碩学 Rolf Alfred Stein のもとに送られ、そこで研究されることになった。Stein は、写本の文字が明晰でありまた出版するのにも適していることから、この写本のファクシミリを出版することに決めた。しかし一方で、同写本が多くの綴り字の誤りを含むことから、イタリアの学者 Giuseppe Tucci 所有の無頭体 (dbu med) のバシエ写本と対校を施すことにした。そして、Richardson 将来の写本写真と、ページごとの簡単な内容の概要、そして簡単な索引を附して出版したのであった。この時点ではテキストを訳出するまでには到らなかったのであるが、いずれにせよこの出版により、『バシエ』写本が初めて学界に提供されたことになった。

さて、同写本の冒頭に、「ツェンポであるチソンデツェンと学者「シャーンタラクシタと」阿闍梨バドマ「サムバヴァ」のときに、ストラとマントラを区分なごったことについての、補足された (zhabs brags ma) バ氏の遺教(バシエ)<sup>④</sup>とある。また同写本九二頁三—四行目にも、「詳細なバシエ」(*sha bzhed rgyas ba*) として知られる「書」は注釈を本文として記してあるので、文がより多くなっているだけである。このバシエについては、『補足されたバシエ』と呼ばれるものである。<sup>⑤</sup>とある。すな

わち、この写本は『補足されたバシエ』であることがわかる。

ではその補足された箇所というのがどこかということ、本写本では六五頁第一六行から九二頁第九行までに当たり、古代チベット帝国の滅亡からグゲ王朝にいたるまでの事情が簡単にまとめられている。

『バシエA』の成立年代について、Steinはintroduction(序)にて次のように述べる。「この写本の最後にはアティシヤの入蔵が言及されている。この版は、つまり十一世紀末以降に係る。H. E. Richardson氏は十四世紀と推定しているが(Richardson, 1952), *Ancient Historical Edicts a Lhasa*. London, p. 4, n. 2) 一方、

George Roerich氏は十二世紀または十三世紀のあるカダム派のラマによるものではないか、と考える(口頭の教示による)」。しかしRoerich氏の「口頭による教示」の根拠が何かは分からない。いずれにせよ、『バシエA』の成立はそれほど古く遡ることはできず、十四世紀あたりとみられる(Pasang and Diemberger 2000: 1)。しかしながら注目すべきはニヤンレル・ニトウーセル(一一二四—一九二二)著の『ニヤンレル仏教史』(*Chos 'byung me tog snying po sbrang rtsi'i boud*, 十二世紀後半成立)が『バシエA』の補足部分とはほぼ同一文を共有していることである。すなわち、すでに十二世紀にはバシエの補足部分のテキスト

トがすでに完成し、かつ出回っていたことになる(Sørensen 1994: 634-635)。そのテキストが何時『バシエ』に補足として組み込まれたのかは不明だが、いずれにせよ、補足部分として十二世紀にまで遡り得るということは、『バシエ』の成立年代を考慮する際に留意しておく必要がある。

なお、Steinは訳注を出版するに至らなかったのであるが、別に中国語訳が出版されたことを付言しておこう。

『抜協訳注』、四川民族出版社、成都、一九九〇。

本書は中国語訳のみならず、チベット語テキストを活字に起こし、また索引を付している便利である。

また、一九六八年、ダラムサラより『バシエ』の活字本が次のような表題にて出版された。

*Tsan po khri strong lde bkan dang mkhan po slob dpon  
palmi'i dus mdo sngags so sor mdzad pai sha bzhed zhags  
btags ma. Shes rig par khang, Dharamsala, 1968.*

この書はStein 1961と同じ表題を持つ。Dan Martin (1997: 23)

によると、本書はStein版のコピーであり内容もほぼ同一であるところ。

上記の『バシエ』に加え、一九八〇年、新たな『バシエ』が中国から活字版として出版された。

Mgon po rgyal mshan (ed), *Sha bzhed, Mi rigs dpe srung Khang, Pe cing*, 1980. [中国語表題：巴色朗(巻)、『巴協』民族出版社、北京、一九八〇〔以下、『バシエB』〕]

Mgon po rgyal mshan 氏編集による『バシエ』の活字版である。「説明」(gsal bshad) によると、本書は民族文化宮図書館所蔵の写本、西藏自治区档案局所蔵の写本、西藏社会科学院の元所长 Phun tshogs tsho ring 氏所蔵の写本を基にして出版された。ただし、奥書には別に「本書根拠民族文化宮図書館収蔵の手写本整理出版」と記してあるから、民族文化宮の写本を底本にし、他の二写本を対校本としたのであろう。口絵に写本の写真が付されており、無頭体で書写されていることが確認できる。内容は『バシエA』と明らかに異なるのみならず、より古い形を残すとみなされ、およそ十二世紀に成立したと考えられる(Sorensen 1994: 634)。なお、テキストの奥書によると、写本自体はある鉄

寅年(庚寅)八月吉日にSnyasの主(brsun pa)であるLdum bu mani 'arga siddhiなる人物によって写された(『バシエB』八二頁)。

ここにおいて、二種類の写本が学界に紹介されたことになる。この二種類の『バシエ』に、他書引用の『バシエ』逸文を加えた上で、先に述べたような『バシエ』研究が陸続と発表されたのであった。

\* \* \*

状況が一変したが、二〇〇一年に全く新たな系統の写本が出版されてからである。

Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger, *dBa' bzhed: The Royal Narrative Concerning the Bringing of Buddha's Doctrine to Tibet*, Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2000 [以下、『バシエC』]

この写本はラサの西藏博物館に所蔵される。全部で三一葉ある三一・五×七・五cmの小テキストで、無頭体で記述されている。写本は三部で構成され、すなわち、第一部(一葉表〜二五葉裏)はテ

キスト本文、第二部(二五葉裏―二六葉表)はバ・セルナンの娘の死とバ・サンシの死についての短い記述、そして第三部(二六葉表―三一葉裏)は *ngag pa* なる仏教儀式の歴史に関する記述である。テキストのどこどころに注や補足が見られるが、本文とは別人の手によるものである。また、第三部もやはり前の二部とは別人の手による。

この写本の最大の特徴はなんといってもその題名である。もともと『バシエ』とはバ氏の遺教である。バ氏とは古代チベット時代から続く名族であり、古代チベット帝国一代を通じて重要な役割を果たしたことで有名であるが、問題はその氏族名の綴りである。

古チベット語では、碑文から敦煌紙文書に至るまで、バの氏族名は必ず *dba* ②と綴られる(すなわち現代ラサ方言では *wa* と発音される)。しかし、後世のチベット語文献では *sha* または *ha* と綴られるのが通例なのである(つまり現代ラサ方言では *pa* と発音される)。今まで公開された二種の『バシエ』写本でも、その題名は *Sha bzhed* であり、またテキスト内においてもバ氏は全て *Sha* と綴られているのである。ところが新発見の写本では、題名が *Dba' bzhed* と綴られていた。すなわちこの題名自体、同写本がより古層を反映していることを如実に示しているのである。

当写本は紀年をもたない。しかし、Pasang and Diemberger (2000: 11-14) によると、(1) 一般的に中世チベット文語には現れない、古チベット語特有の術語や綴りが現れること、(2) 古チベット語史料と記述が一致する箇所が存在すること、(3) 古典チベット語史料、それも中期以降に現れるような伝説的記述がないこと、という三つの特徴が観察され、したがって、当写本が他のバシエよりも古い系統に連なると考えられる、という。さらに本出版の Preface にて、Per Sørensen はテキストの成立を十一世紀頃と推定している (Pasang and Diemberger 2000: xiv)。

二〇〇一年に出版された『ワシエ』は、学界に多大な衝撃を与え、かつその簡明な訳注によって概ね好評をもって迎えられた。

しかし、問題がないわけではない。特に肝腎のチベット語テキストが提供されなかったことは残念なことであった。巻末には写本の白黒写真が附されているので、それを参考に各自がテキストを作れば良いと言われればそれまでだが、実際のところ、附録の写本のサイズが小さく、多くの箇所でテキストを読むことができないのである。特にテキスト正文はまだしも、微細な草書体で書かれている挿入注にいたっては、読解はほぼ絶望的である。

つまり、当写本について今後の課題は校訂テキストの作成である。ただし、この欠を埋めるべく、『ワシエ』の校勘テキストを

作成するプロジェクトが大英博物館研究員の Michael Willis 氏を中心に進められていることを付言しておこう。

それだけではない。新写本の『ワシエ』が古い系統に属することを証明する文書が、敦煌文書の中に見つかったのである。その新文書の報告が次の論文である。

Sam van Schaik and Kazushi Iwao (2009 [2008]), "Fragments of the Testament of Ba from Dunhuang," *Journal of American Oriental Society*, 128, 3, pp. 477-488.

テキストは現在大英図書館所蔵で、Sir Aurel Stein が敦煌から持ち帰った、いわゆるスタインコレクションに含まれる。文書番号は Or. 8210/S. 9498 (A)+S. 13683 (C) である。小断片であり、テキストもわずかに六行を残すのみである。しかし一見して明らかに古く、テキストは古チベット語の書体で記されている。その内容は、シャーンタラクシタがラサに到着したときのエピソードにあたる。このエピソードは各種『バシエ』に載る有名なものであるが、興味深いことに、本断片のそれは『バシエA』や『バシエB』よりも、むしろ『ワシエ』のテキストと非常に似通っているのである。

（敦煌文書が発見された藏経洞（敦煌莫高窟第十七窟）は十一世紀初頭に閉められたのであるから、文書の下限は十一世紀初頭である。そうすると、この断片は、『ワシエ』系統の写本が他の『バシエ』写本よりも古層に属することを証明したことになる。またそれだけではなく、『バシエ』の原型が紛れもなく十一世紀以前に遡り得ることを明瞭に示したのである。これまでも、『バシエ』の中核部分は帝国期に遡ることができるとは言われてきた。しかし、この断片の発見によって、我々は『バシエ』の原型が少なくとも十一世紀以前に成立し、そしてそれが敦煌にいたるまで流通していたことを確認できたのである。

さらに二〇〇九年八月、中国の民族出版社から新たに『バシエ』の編纂書が出版された。<sup>⑦</sup>

Bde skyid, «*Rba bzhed» phyogs bsgyis*, Mi rigs dpe skrun  
khang, 2009 [徳吉「巴協」匯編], 北京・民族出版社]

書題が伝えられるとおり、『バシエ』写本の編集本であり、中国各地にある『バシエ』四点を活字に起こしたものである。四点の表題は以下のとおりである。

(1) *Bisan po khri srong bisan dang mkhan po slob dpon  
padma'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sha bzhed zhab's  
bhas ma*

(2) *Sba bzjed*

(3) *Chos 'byung gi yi ge zhib mo*

(4) *Dba' bzhed*

このうち(1)はサキヤ寺に所蔵される写本であるらしいが（同書…三頁）、表題からその内容からも Stein 1961 と同系統の写本、すなわち『補足されたバシエ』であることは間違いない。また同様に、(2)と一九八〇年出版の北京版とは同系統の写本であろう。また(4)が『ワシエ』であることも間違いないであろう。この(4)については、既に述べたとおり Pasang and Diemberger 2000 では文書写真のみが公開され、いまだテキストが作られなかったのであるから、一般の活字版は歓迎されるべきものである。

一方、(3)は今まで言及されたことのない写本のものであり、少なくとも筆者にはどのような来歴のものか知らない。筆者は現段階のところ詳細にテキストを比較検討したわけではないが、今後この写本の正体を出所を含め明らかにする必要があろう。

\* \* \*

以上『バシエ』写本について最近の出版も含めて述べた。総じて言えば、一九六一年の Stein 1961 と一九八〇年の『バシエ A』、『バシエ B』の出版により研究が高まり、さらに『ワシエ』の出版以降、ますますバシエへの学界の興味は高まりつつある。例えば、二〇〇八年十一月二四日、“*Dba' bzjed and the Early History of Tibet*”と題した『ワシエ』に関するセミナーがロンドン G School of Oriental and African Studies, University of London にて開催された。一日のみの比較的小規模なセミナーではあったものの、一つの写本のみを主題としたセミナーが開かれること自体、『バシエ』、特に『ワシエ』がいかに現在のチベット研究において注目を集め、また重要な位置にあるかをうかがい知ることができるのである。なお筆者は同セミナーが開催されたとき、ちょうど日本学術振興会海外特別研究員としてロンドンの大英図書館に長期滞在しており、幸いにしてこのセミナーに参加することができた。以下はセミナーの当日研究報告リストである。

1. Sam van Schaik and Iwao Kazusni, “Fragments of the dba  
zjed from Tun Hong”



2. Michael Willis and Tsering Gongkatsang, "Observations on the structure and production of the dpa' zhed"
3. Lewis Doney, "The bka' gtsigs of Khri strong lde brtan in the dpa' bzhed"
4. Brandon Dotson, "Reflections on the Zas grad and its old Tibetan influences"
5. Hildegard Diemberger, "Political theories in the Buddhist-Bon po debate in light of archaeological and anthropological evidence"

報告タイトルを一旦見てわかるとおり、『ワシエ』写本自体についての研究からテキスト内容についての研究にいたるまで、多角かつバリエーションに富み、セミナー後の全体議論においても活発な意見交換がなされた。

\* \* \*

『ワシエ』の出現に加え、敦煌出土の『バシエ』が発見されたことと、そして中国出版の『バシエ』活字本が出現したことにより、『バシエ』に関する史料は格段に増えた。かかる状況のもと、『バシエ』に対する関心は今後ますます盛んになることは間違いない。

なのである。以下、筆者の考えつく今後の課題について述べておこう。

まずは、本書の成立事情についてである。『バシエ』の由来は必ずしも明らかではない。先に言及した『ニヤンレル仏教史』によると、チンデンツェンがツェンポ位にあつたとき、dka' gtsigsの文が三通作成され、一通はラサに、一通はカム地方に、もう一通は皇帝家の宝物庫に納められたという(四一〇頁)。これとはほぼ同文な『バシエA』と『バシエB』に見られる。

さらに、『バシエB』(八二頁)には「【その dka' gtsigs は、】バ・セルナンによる詳細な dka' gtsigs として書かれた。サムイエ僧院の dka' gtsigs の前半は「造教」(dka' chems) として書かれたが、サムイエ僧院【の縁起】をみるのにはそれ無しではどうしようもない、と言われる。それが『バシエ』として知られるのである。」(sba gsal snang gi dka' gtsigs kyi yi ge rgyas par bris pa'o / bsam yas kyi dka' gtsigs kyi stod dka' chems su bris pa / bsam yas lta na khyad par du 'di med thabs med gsung ngo / sba bzhed du grags so) とある。

また、『バシエA』すなわち『補足されたバシエ』の末尾(九一頁—九二頁)においては、「本書は【『詳細な dka' rtsis (= gtsigs?)』に補足したものである。完。】(dka' rtsis kyi yi

ge zhib mo la zhabs brags pa'o // rdzogs so)とある。すなわち『バシエ』とはすなわちツェンポのbkai' gtsigsそのものである。とらうことなる。Bka' gtsigsとは「誓い」や「憲章」を意味する語であるが (Denwood 1990)、『バシエ』の場合は何を指すのか必ずしも明瞭ではない。『バシエ』の内容は明らかに「誓い」や「憲章」ではなく、物語調であるからである。

一方、本書の内容の大半部分はサムイエ僧院建立に関わるから、本書は『サムイエ僧院の目録』や『サムイエ僧院の遺教』とも呼ばれた。例えば、サキヤパ・ソナムゲンツェン (Sa skya pa bsod nams rgyal mshan. 一三二二—一三七五) の『王統明示鏡』(Rgyal rabs gsal ba'i me long. 一三六八年成立<sup>⑧</sup>)は、『サムイエ僧院のka tsigs』(bsam yas kyi ka tsigs)なる書を引用しているが、その引用内容からいって明らかに『バシエ』のことである。また、一六四五年から一六六五年にかけてパヲ二世・ツクラクテンワ (Dpa' bo gtsug lag phreng ba. 一五〇四—一五六六) によって編まれた歴史書の大作『学者の喜宴』(Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston. 一五四五—一五六四年成立<sup>⑨</sup>)の、特にいわゆる前伝期を扱う[aの章にて、『バシエ』は何度も引用されているが、章末の参考文献リスト(四六〇頁)には『サムイエ僧院の大目録』または王統記である大・中の『ワシエ』(bsam yas

kyi dkar chag chen mo'am rgya rabs dpa' bzhed che 'bring) とある。

さて、チンテンツェンのbkai' gtsigsとしてバ・セルナンにより作成され、各地に置かれた三通のうちの一つが『バシエ』であった、としよう。ではその場合、『バシエ』とその他の三通との関係はどうなるのか。この三通と関係があるほうにも見える書が、十三世紀の高僧サキヤパンティタ (Sa skya pandhita kun dga' rgyal mshan. 一一八二—一二五二) 著の『善男子たちに送る手紙』(Shes bu dam pa namas la springs pa'i yi ge) <sup>⑩</sup> において引用されている。その手紙には『キヤルンヘ』(Rgyal bzhed)、『バシエ』(Dpa' bzhed)、『バンンヘ』(Bangs bzhed)と云々三種の歴史書が引用しているが、このうちの『バシエ』は明らかに『バシエ』のことである。

一方スムバケンポ (Sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor. 一七〇四—一七八八) は、歴史書『バクサムジモンサン』(Dpag bsam lion bzang) <sup>⑪</sup> にて次のように説明する(三〇四頁)。

【歴史書の記述の】大部分の元になっている『バシエ』という【書】は、バ・セルナンとバ・サンシなどがサムイエ僧院の歴史を編纂し、僧、王、大臣のところにそれぞれ留めたも

のだが、それに対し、『それらに』少々の増減を施した『ラシエ』(＝ラマの遺教)、『ギエルシエ』(＝王の遺教)、『ロンシエ』(＝大臣の遺教)という三書ができて、後に文章等が長短のあるものも幾つか成立した。<sup>⑬</sup>

さらに、十九世紀アムドの名刹ラフラン僧院を中心に活躍した

高僧アク・シエラブギヤムツォ (A klu shes rab rgya mtsho.

一八〇三—一八七五)は、自らの見聞きした稀観書のリスト *Dpe*

*rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer ying kyu kunda*

*bzhed pa'i zlo 'od 'bum gyi snye ma bhed pa* (別名『アクの『稀

観書』リスト) *^A klu tho yig*)を残した。<sup>⑭</sup>このリストの「伝

記・仏教史・歴史」(rnam thar chos 'byung deb ther) 項に挙げ

られるのが、『バシエ』を含む次の三書である。

バ・シエルナンなど王国の大臣が編纂した『ギエルシエ』

(*rgyal bzhed*)<sup>⑮</sup> 『ラシエ』(*bla bzhed*)<sup>⑯</sup> 『バシエ』(*sba*

*bzhed*)<sup>⑰</sup>

つまり、三ヶ所に置かれたツェンポの *dka' gsis* と『バシエ』<sup>⑱</sup>

そして『バシエ』とその他の二書とは明らかに関係があるのだが、

委細がよくわからない。そもそも『ギエルシエ』や『ラシエ』、また『バシエ』や『ロンシエ』などと呼ばれる書はどのような内容を持つのか？ 残念ながら、いまだこれらの書は未発見なのである。

\* \* \*

もう一つの問題は、『バシエ』各写本の流布状況を説明することである。『バシエ』とはことほど左様にチベット史学における重要文献なものにも拘わらず、本書の版本は作られなかったように、少なくとも、我われの知る限り、現在に伝わる『バシエ』は全て写本なのである。そして版本が作られなかったことは、『バシエ』に多くの異本を誕生させる一要因となったのであった。例えば『学者の喜宴』の「」章には、様々な異本『バシエ』が引用されている。すなわち、『バシエ』(*Rba bzhed*)に加え、『本物のバシエ』(*Rba bzhed khungs ma*)<sup>⑲</sup> 『不純なバシエ』(*Rba bzhed lhad can*)<sup>⑳</sup> 『大バシエ』(*Rba bzhed che ba*)<sup>㉑</sup> 『中バシエ』(*Rba bzhed 'bring ba*)<sup>㉒</sup>などが引用されている。すなわち、少なくとも一六世紀においてはこれだけの『バシエ』の異本が併存していたのであった。

しかもこれら『バシエ』の異本は、時において相互に異なる記

述を載せる。『学者の喜宴』（三五八―三五九頁）には、次のようにある。

『大バシエ』によると、「試み」の人々はサムイエ落成祝いの後に授戒したが、『中バシエ』によると、授戒はサムイエ落成の後ではあるが落成祝いの前に行われた。<sup>16)</sup>

また、ゴ・ロツマワシヨンスペル（Gos lo tsa ba gzhon nu dpal. 一三九二―一四八一）著の歴史書『青冊史』（*Deb ther sngon po.* 一四七六―一四七八年成立）中において、『純バシエ』を引用した、とわざわざ記すのも、当時『バシエ』の異本が数種知られていたからに違いない。

さらに、既に引用したとおり、『バシエ』の一写本である『補足されたバシエ』（九二頁第三行目―第四行目）には、次のようであった。

『詳細なバシエ』（*sha bzhed nyas pa*）として知られる「書」は注釈を本文として記してあるので、文がより多くなっているだけである。

『バシエA』には、アティシヤの人蔵といった十一世紀の情報が含まれる。すなわち、『バシエ』が後世に伝わる過程で、新たに内容が補足、あるいは改定され、そしてその結果として様々な異本が生み出されたのである。

要するに、『バシエ』には多くの異本がありそれぞれ内容が違っている。そこで、まずは現在ある写本テキストを比較検討することが必要であろう。特に中国から新しく出版された『巴協匯編』のうち、*Chos 'byung gi yi ge zhi mo* がどのようなテキストであるのか、詳しく検討を加える必要がある。

一方で逸文として残る『バシエ』各種写本の回収を行う必要がある。先に述べたとおり、『学者の喜宴』の「a」章には、様々な異本『バシエ』が大量に引用されているが、これらのうちのどの写本が現行『バシエ』のどれと一致するのか、検討されていないのが現状である。これら逸文を収集して既出版の『バシエ』と比較検討していくことは、現在の『バシエ』各写本が、何時どのよう成立したかを知る上で不可欠な作業であろう。

さらに注意すべきは、『バシエ』に関連する書物の存在である。これら他書の存在は、『バシエ』とはそもそもどのような書であったのか、を考察するうえで非常に重要である。そして先述したように、十二世紀にサキヤバンデイタは『バシエ』とともに『ギ

ヤルシエ』、『バンシエ』なる書物を引用した。つまり少なくとも十二世紀には、『バシエ』以外に上記二書をセットとして認識していたのである。『バシエ』と姉妹本との関係は、少々形を変えつつもとにかく後世に認識され続けたのであった。

現在我々の手には『バシエ』しかなく、『ラシエ』、『ギェルシエ』、『ロンシエ』など姉妹書の行方は杳として知れない。また『バシエ』写本がチベットにおいて比較的流通していたことは様々な書に引用されることから明らかであるが、他の他書の流通はほとんどなかったのか、現在にいたるまで逸文さえも発見されていない。

では、そもそも他書は存在していなかったのか？しかし、先に述べたアク・シエラブギヤムツォの手になる稀覯本リストには、『バシエ』とともに『ギェルシエ』と『ラシエ』なる二書が言及されていた。もし、彼が実際に目撃した書物に基づいてこのリストを作成したとすれば、『バシエ』に関係深いはずである二書は十九世紀にはまだ存在したということになる。

一九五九年以降において、チベット語文献の稀覯書や散逸書が再発見されることは珍しいことでない。亡命チベット人が持ち出した大量のチベット語文献と亡命した高僧によって、世界のチベット学は長足の進歩を見た。また、中華人民共和国の一部となっ

たチベット地域からも、その後多くの稀覯書が活字出版されることとなった。稀覯書や散逸書の再発見と出版は、現在でも続いており、例えば、古代期の九世紀初めに編纂されたがその後散逸したと長らく考えられていた仏典目録の一つ、『パンタンマ目録』がなんと西藏自治区の西藏博物館に所蔵されていることが判明し、二〇〇三年に出版された。また『噶当文集』を初めとするカダム派の未出版文献が近年大量に出版されたことは記憶に新しい。散逸したと考えられていたチベット文献の再発見はこれからも続くであろう。そして、『バシエ』の未発見写本や、姉妹書が世に出る日もそれほど遠くないであろう。

① 『編年記』は敦煌出土チベット語文書 Pelliot tibétain 1288+101 [Tib.] 750-761 Or. 8212/1877 『年代記』は同 Pelliot tibétain 1287にそれぞれあたる。J. Bacot, F. W. Thomas and Ch. Toussaint (1940-1946), *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris を始めとして多くの研究がある。なお、出土文書の種類とその価値について簡潔に知るには今のところ G. Uray (1979), "The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 AD: A Survey," J. Harmatta (ed.), *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest: Akademiai Kiado, pp. 275-304 がよい。ただし昨今の史料状況と研究状況を鑑みると、新たにアップデート版が必要であろう。また、現在の古チベット文書研究の状況について知るには、武内紹人 (二〇〇九)、「古チベット文書研究の現段階」、『東洋史研究』

- 第六七巻第四号、一三三—一三九頁がある。
- ② 例えに Dan Martin, *Tibetan Histories*, London, Serindia publications, 1997 を参照された。同書には、主要なチベット語史書7011点が成立年順に並べられ、それぞれに簡潔な紹介がなされている。「バシエ」は第一番目、すなわち最古の文献として挙げられている。
- ③ 原著は A. I. Vostrikov, *Tibetskaj Istorickoj Literatura* (Biblioteka Buddhica, XXXII), 1962. Vostrikov の死後、ロシア語で出版されたが、一九七〇年の英訳版により広く学界に知られるようになった。筆者の引用は全訳英訳版による。なお、原著のロシア語版は表の「総覧」もしたが、二〇〇七年に増補を得て再出版された。書籍情報サイトによると、A. I. Vostrikov (au), A. Zorin (ed), *Tibetskaj Istorickoj Literatura*, Sankt-Peterburg: Russian Academy of Sciences, Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, 2007.
- ④ bisan po khri strong lae bisan dang mkhan po slob dpon padmi'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sha bzhed zhabz brags ma bzhags so //
- ⑤ sha bzhed rgyas par grags mochan dkyus su bris par 'dug pas / yige mang ba tsam du 'dug go / sha bzhed 'di la zhabz brags ma bces pa 'di yin /
- ⑥ Nyang ral nyi ma 'od zer, *Chos 'byung me tog snying po sbrung rtsi'i baid*, (Gangs can rigs mdzod series no. 5), lhass: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1988. [中国語題：娘・尼瑪卓色『娘氏宗教源流』、拉萨：西藏人民出版社]
- ⑦ 井内真帆女士(神戸市外国語大学客員研究員)の尽力により、本書を落手し得た。記して謝す。
- ⑧ Sa skyva bsod nams rgyal mtshan, *Rgyal rabs gsal pa'i me long*, mi rigs dpe skrung khang, 1981. [藏語・英語題式『西藏王統記』、北京：民族出版社]
- ⑨ *Rgyal rabs gsal ba'i me long* (二〇四頁) 27 [チベット語の tsigs (bka' tsigs) འདུག་པོ། འཇུག་པོ། (bsam yas kyi ka tsigs (bka' gtsigs) na) への引用内容は明らかで「バシエ」のそれと等々。
- ⑩ Dpa' bo gtsung lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*, 2 vols., mi rigs dpe skrung khang, 1986. [田越・根拉陳氏『藏密講義』、北京：民族出版社] .
- ⑪ *Sa skyva bka' 'bum*, vol. 12, fol. 72b4, Toyo bunko, 1968.
- ⑫ Sunn pa ye she's dpal 'byor, Chos 'byung dpag bsam lion bzang, Kan su' mi rigs dpe skrun khang, 1992. [蔡田堪宗『蔡田王統記』、蘭州：甘肅民族出版社] .
- ⑬ de phal cher gyi rtsa ba ni sha bzhed ces sha gsal snang dang sha sang shi sogs kyi's bsam yas kyi lo rgyus bsgribs te dge 'dun rgyal lion gsum gyi sar re re bzhang pa la phri snon cung zad re byas pa bla bzhed rgyal bzhed sha bzhed ces pa gsum byung
- ⑭ Chandra, Lokesh (1963), *Materials for A History of Tibetan Literature*, Part 3, New Delhi, p. 512.
- ⑮ Chandra (1963), Nos. 11014-16.
- ⑯ rba bzhed che ba'i dngos bstan kar bsam yas dga' ston tshar nas sad mi namts tu byung ba kar bshad cing rba bzhed 'bring ba las bsam yas tshar nas zhal stro ma byas pa'i bar der rab tu byung bar bshad
- ⑰ 'Gos lo ts'a ba gzhon nu dpal, *Deb ther sngon po*, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1985. [書名』成部：四川民族出版社』五〇頁。 Cf. G. Roerich (1949), *The Blue Annals*, Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal, p.v. 39.

⑮ Ko zhuI grags pa 'byung gnas and Kgyal ba blo bzang mkhas grub (編)『Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod』1992『雪域歴代名人辞典』蘭州：甘肅民族出版社に於て、彼は「ウ・ツァンなど他の僧院にお行きになつた」とはなかつたが、ララン・タシキル僧院にて聞思修の三つと、説法・議論・著作の三つによつて生涯を過ごされた(八九六頁)とある。彼が実際に稀観書を見たとすれば、リストの大半はアムドの何処か、あるいはラフラン僧院の蔵書であつた可能性がある。

⑯ *Dkar chag 'phang thang ma / Sgra 'byor ban po gnyis ka*, Mi rigs dpe strung khang, 2003『『勞塘目錄・声明要領二卷』北京：民族出版社』この書が出版されるや、パンタンマ目録に関する次のような研究が矢継ぎ早に三報出されたことは、如何にこの目録に対する注目度が高いかを物語るものである。G. Halkias (2004), Tibetan Buddh-

ism registered: a catalogue from the Imperial court of Phang thang. *The Eastern Buddhist*, vol. 36 川越英真 (二〇〇五a)、『パンタン目録』の研究、『日本西蔵学会々報』第五一号、一五—二二頁 川越英真 (二〇〇五b)、『dkar chag 'Phang thang ma』仙台：東北インド・チベット研究会

⑰ その価値については、吉水千鶴子 (二〇〇八)、『チベット仏教研究に新時代を開くか』、『東方』第三三三三号、二〇—二三頁を参照されたい。

補遺：脱稿後、次の論考を知つた。津曲真一、『パシエ』訳註(一)——マシヤン・ドムパキエの失脚——、『四天王寺大学紀要』第五十号(二〇一〇)、四二九—四六二頁。本稿で言う『パシエA』の翻訳である。併せて参照されたい。

(神戸市外国語大学客員研究員)